

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成28年 6月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科

職名・学年 博士課程1年

氏 名 夜 久 愛

助成の種類	平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	2016年欧州リウマチ学会		
発表題目	"Handedness influences the laterality of clinical and radiological articular involvement in rheumatoid arthritis"		
開催場所	イギリス・ロンドン		
渡航期間	平成28年 6月 7日 ～ 平成28年 6月12日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券	270,980円
		宿泊費	87,690円
		参加登録料	43,200円
上記に充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 助成金をいただくことで貴重な経験をすることができ、心より感謝しております。ありがとうございました。 欧州リウマチ学会で得られたことを最大限に活かし、今後の免疫・膠原病診療の向上のために、引き続き邁進していきたいと考えております。		

成 果 の 概 要

イギリスのロンドンで開催された、免疫・膠原病内科で世界的に権威のある学術集会である欧州リウマチ学会に参加し、"Handedness influences the laterality of clinical and radiological articular involvement in rheumatoid arthritis"という題目のポスター発表を行ってきた。(以下ポスターの内容：関節リウマチ(RA)は滑膜炎による関節破壊を主病態とする慢性疾患であり、関節炎に左右差があることが多く、運動負荷により関節炎が悪化した症例を経験することが多い。RAにおける関節破壊は利き手側がより進行するという報告が過去にいくつかなされているが、過去論文のほとんどは右利きの患者しか対象にしておらず、右手で関節破壊が進むのか、利き手側で関節破壊が進むのかは不明である。RA患者の利き手と関節破壊の進展の左右差の関係性を明らかにするために、京都大学におけるKURAMAコホートにおける334人のRA患者を対象として臨床所見(DAS28で使用する28関節の腫脹及び圧痛関節数の合計)と画像所見(modified Total Sharp Score)による関節障害を利き手ごとに分類して評価を行った。其の結果、RAにおいて、右利き・左利きに関わらず利き手側の方が手の関節破壊は進行しやすいという結論を得た。) 欧州リウマチ学会は近年、演題応募数が増加しており、2015年度は4300以上の発表が採択され、より一層大規模な集会となっており注目を集めている。そのような集会で発表をすることで、広く情報を発信ができたと感じている。そして、ポスター発表中に何人かの参加者とディスカッションを行うことができ、新しいアイデアを得ることもできた。その中で最も印象的であったのは、イスラム教徒は食事を含め多くのことに右手を使うので利き手以外にも左右差をきたす原因があるという、エジプトからの参加者の意見であった。日本で研究をしている時には思いもつかなかった発想である。本研究は、さらにエントリー数を増やして追加報告をする予定としているが、利き手以外にも作業内容や文化の違いによる関節障害についても今後、着目していきたいと考えている。

欧州リウマチ学会に参加するのは今回が初めてであり、自分のポスター発表以外でも数多くの学びがあった。日本のリウマチ学会に比べてポスターの数は圧倒的に多く、内容も多岐にわたっていた。他の参加者のポスター発表からは世界の各地で現在どのような研究がなされているのか、自分の知らない新しい知識や考え方などを学ぶことができ、自分の研究・診療のレベルを世界の枠組みの中で体感することもできた。日本で研究・診療をしているときには感じることはできなかった貴重な経験であった。また、欧州リウマチ学会で採択されている演題は、日本のリウマチ学会と異なり、強皮症、乾癬性関節炎、変形性膝関節症、結晶誘発性関節炎が多かった。今まで以上に深く、多方面からこれらの疾患についての知識を増やすことができた。また、各

セッションでは、最近の新しいデータ、世界の膠原病診療をリードする欧州リウマチ学会からの recommendation、recommendation を作成するまでの経緯を含めて聞くことができた。もちろん、学会に参加しなくても後日、インターネットなどで配信される時代ではあるが、ガイドラインを作成している有名な先生の話を生で聞くことが出来たということは自分にとっては大変貴重な機会であり、研究・診療に対するモチベーションは多いに向上した。今回の欧州リウマチ学会で得た知識・アイデアを今後の免疫・膠原病診療の発展のために、引き続き役立てていきたいと考えている。